

人間が手出せんでも殺を司る天といふものがあつて殺すのであるから、人間がさう手出をして殺すのは丁度大工の師匠に代つて木を削るやうなもので手を傷つけどうしである。人間が天に代つて餘り手出をすると却つてよくない。捨て、置いてよいかといふとさうではないが餘り法を繁くしては却つて善くない。現代でも法はあるが上にも作つて行くが却つて其れを犯す者が多くなる。老子の云ふことに眞理があるのです。法律家は法の缺點があれば又附け加へて行くが法が細かくなればなる程法を犯す者が増える。

民之飢章第七十五

民之飢^ハ以^テ其上^ノ食^ヲ税^ス之多^キ。是以^テ飢^ユ。民之難^キ治^ル。以^テ其上^ノ之^ヲ有^ラ爲^ス。是以^テ難^シ治^ム。民之輕^ク死^ス。以^テ其^ノ求^ム生^ヲ之^ヲ厚^ク。是以^テ輕^ク死^ス。夫^レ惟^ニ無^ク以^テ生^ヲ爲^ス者^ハ。是^レ賢^ニ於^テ貴^シ生^ヲ。

人民の難儀をするのは税を多くするからである。政治が悪いことをいふ。民の治め難きは上の者が色々細工をして巧らみ手出しを餘りする。何もせずに居ては無能といはれるから何

か事をする。兎角智慧才覚のある者はじつとして居れない、色々事を拵へる。そこでむづかしくなつて来る。民の治め難きはかういふわけである。

餘り生きたい生きたいとするから死をまねくことになる。これでは風邪を引くからと厚着をする、着た上にも着る。これでは滋養が足らんからと云つて食つた上にも食ふ。さうすると結局悪くする。それが死を輕んずる事である。生を以て爲すなき者、任せておく。これが頻りに養生法を研究するよりも勝つてゐる。長生きする者は多くはさうなんで、長生きした者に養生法を聞いて見ると別にどうもしない人である。

これ迄美味しい物を食つてゐた人が玄米飯に宗旨がへをした人がある。私は東京へ行くと玄米食堂へ行くことにして居ますが其處で其の人にひよつくり出遇つた。其の人の話では今まで御馳走ばかり食つて居たがどうも身體がよくない。自分だけでなく金の多くある連中は皆同じやうに身體が悪くなる。そこで自分は最近玄米飯にした、さうすると身體が善くなつて來たと云ふ。其の人は身體が悪いといふので、どうしたら長生き出来るかと年が寄つてからであるが玄米の狐壽司を食つてゐると話をしてゐた。自分は十數年玄米食をしてゐるが、其の人はさう云つて自分に玄米飯の効能を話して聞かせた。若い諸君は御馳走を食ふのもよいが野菜食がよいのです。

老子が「其求_レ生之厚、是_レ以_レ輕_レ死、」と云つてゐるが、實際の情を穿つてゐる。然し一向無頓着に不攝生をしてゐることではない。自然に任せることで、無理をしないことをいふのである。

人之生第七十六

人之生也柔弱。其死也堅強。萬物草木之生也柔脆。其死也枯槁。故堅強者死之徒。柔弱生之徒。是以兵強則不勝。木強則共。強大處下。柔弱處上。

柔弱だから生きる、堅強であると死す。生きてゐる間は柔軟ですが死んでしまへば硬くなる。柔軟であるから生きる、硬いと兎角ぶつかつて死ぬ。木の芽でも若い内は軟かい、段々硬くなると死が近づく。人間にも動脈硬化といふことがある。故に強堅なものは死の仲間である。そこで強いとか弱いとかは軍で目立つから、兵で云へば強がりをする兵は勝たない。木も強ければ則ち共す。共は拱で一抱へをいふ。一抱へもある大きな木になると伐り倒され

る。強大な者は下に處る、柔弱な者は上に居る。柔弱の方が上だといふのです。上下の位を強ひて云つたのではない。強堅よりも柔弱の方が善いと云つたわけです。

天之道章第七十七

天之道。其猶張弓乎。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。天之道。損有餘而補不足。人之道。則不然。損不足以奉有餘。孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

天の道は弓を張るやうなもので、高いものは抑へるやうにし、餘あるものは減らし、足らんものは其れを補ふやうにする。自然にさう行くのであります。高い方は人間で云へば位、餘あるは富の方です。天の道は餘ある所は取つて減らして足らん所へ埋め合せをする。然るに人間の道は足らざる人民の所を尙取り立て、餘ある富貴な者に奉ずる。労働者の賃金の上前をはねて富んでゐる者の腹を肥す。一體文化はさういふ性質を持つ。文化の進む程富と貧

の懸隔がはげしくなる。文化の進まぬところ程其の差が少い。これは眞理です。老子の云ふ通りです。

餘があつて天下に奉ずる者が何處にあるか、唯有道者のみである。道ある者は餘あれば天下に奉ずる。是を以て聖人は爲してもこれは自分が爲したと恃にしない。自分の賢ある所を人に見せたがらぬ、これは廣く云ふのです。功成つて功に處らず。自分の手柄があつても我が手柄としない。自分の手柄があつて多くの賞與を貰へば兵卒に分けてやる。それが功成つて處らずです。それは有道者のみとする。乃木將軍が日露戦争の時、他の將軍も賞與があつたが、將軍は金時計を作つて部下の者に與へられた。餘あるもの足らざる者に補ふことになる。それが天の道である。

天下柔弱章第七十八

天下柔弱莫過於水。而攻堅強者莫之能勝。其無以易之。弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。故聖人云。受國

之垢。是謂社稷。主受國之不祥。是謂天下王。正言若反。

凡そ世の中で一番弱いものは水程弱いものはあるまい。水は己れ自身を固執しない、方圓の器に従ふ。あれ程素直なものはない。炎炎と燃える火でも水に勝つものはない。旅行して海を渡つて居るとき岩石に洞穴が穿たれてゐる。波がびたりびたり撫でるやうにして柔かに當つてゐても岩を穿つて居る。其の柔弱を以つて堅強を攻むる位易いことはない。これは唯形に見えるもので譬へたのであるが、其の道理は天下の人は皆知らんことはないが、兎角實行しない。弱いくせに強がりをする。聖人曰く、垢をしのんで受けるさういふ者が國家の主となれる。耻辱だの面目だのと云つて争ふ者は天下を失ふ。國家の不祥を受けるところのものが天下の主と云つてよい。するとこれは世間で云つてゐる事と相入れないやうである。國の不祥を受けるのが天下の王であるといふのが正言であるが俗にさう考へない。何時でも斷乎としてやると云つてもさうは行かない。却つて相手にし易い。さうでなく争はず不祥を受けることが國家を全うすることになる。

和大怨章第七十九

一九〇

和^{グモ}大^ヲ怨^ニ必有^{ラバ}餘^ヲ怨^ニ安^シ可^ク以^テ爲^ス善^ト是以^テ聖^ノ人^ノ執^レ左^ノ契^ヲ而不^レ責^ム
於^ニ人^ニ有^ル德^ハ司^ル契^ヲ無^ク德^ハ司^ル轍^ヲ天道^ハ無^ク親^シ常^ニ與^ニ善^ニ人^ニ

大なる怨は和解しても必ずどこか残る。大喧嘩をする、仲裁が這入る、そこで一杯飲んで仲直りをして、どうも心の中に残つてゐる所がある。少しでも怨の念が残つてゐては善とはいへない、さらりとしまはなければならぬ。斯ういふ所は一寸獨逸譯を讀んで見ますと、西洋人の心理では解し兼ねるやうである。「どうして之を改善してよろしいか」と獨逸人は解してゐる、茲が一寸と違つてゐる。

譬へば人の貪欲でありましもさうです。或ひは一萬圓拾萬圓投げ出す事はある。けれども一紙半錢に心が動く。山鹿素行が「祿は投げ出しても一紙半錢に心が動く」と云つてゐる。又譬へば大きな芥は取り易いが細かい塵は取りにくいものである。大きな芥は取れても細かいのが取れない。修養でもさうで、大きい芥でも小さくても矢張濁るので修養の上から此處がむづかしいのです。

澤庵和尚の解の中にあるのですが、唐の徳宗の時の宰相張延賞と大將の李晟二人が互に仲が悪かつた。李晟思ふに我れ此の人と不和にしては君の爲に盡せないから、李晟より其の事を云つて仲直りをし、其の上にも尙親しくせんとして自分の息子に其の人の娘を貰ひたいと云つたが宰相の延賞は承知しなかつた。そして李晟の云ふには一度仲直りをすれば何もないのである。然るに文士の事はむづかしいものだと言つたといふ。武人は單純で是れ切りだか、文人は尙ほどこか残つてゐる。残つてゐるのはどうして善いと云へやうか。

是を以て聖人は左契を取る。契は木か竹の札を左右二つに割り左契を持つてゐて手形とする證文の事です。證文を取つてゐるが是非拂へよと催促しない。徳ある者は契を司どる。左契の番人をしてゐる。捨てはしない、しまつて置く、其れに物を言はせない。所が轍を司どる、其れに物を言はしてはきくさせるやうにする。何の爲の證文か、證文の番人では一向役に立たんといふことになるがさうでない。此處を獨逸でどう譯してゐるかを見ると「徳ある者は自分の借錢を拂ふ、徳のない者は借錢を拂へといふ」と譯してゐるがこれ等を見ると老子の心が獨逸人には分りにくい所があるやうに思ふです。

小國寡民章第八十

小國寡民。使_レ有_ニ什伯之器_ニ而不用。使_レ民重_レ死_ニ而不遠_レ徒_ニ。雖_レ有_ニ舟輿_ニ無_レ所_レ乘_レ之_ニ。雖_レ有_ニ甲兵_ニ無_レ所_レ陳_レ之_ニ。使_レ民復_ニ結繩_ニ而用_レ之_ニ。甘_ニ其食_ニ。美_ニ其服_ニ。安_ニ其居_ニ。樂_ニ其俗_ニ。隣國相望_ニ。雞狗之聲相_レ聞_ニ。民至_ニ老_ニ死_ニ不相_レ往來_ニ。

老子の此處を見て小國主義だといふ人があるが主義のないのが老子の趣旨である。國を兎角大とする、そして其れを理想として實行するから、それは善くない面白くないのだと云つたのである。十軒の村は十軒の村でよいので、さう何も市に合併して大きくせんでもよいのだ。十人の頭百人の頭の器あらしめて以て用ひず、十人百人の人を治める器があつてもさういふ人に治めさせない。能を問はない。三十軒の小さい村で働いてゐても仕様がなないと神戸の方へ出掛ける、さうすると結核に罹つて死んでしまふ。其れが身體を重んずることである。小なら小で安んずる。舟や車はあるけれども乗らない。畢竟舟も車も不必要だ。出来るだ

け車を利用しよう舟を利用しようとしなさい。兵器はあれども陣を陳ねて敵と相對する事がなさい。甲兵も要らないことになる。結繩、繩を結んで文字の代りにする。結繩に復へるは文化以前に復へることである。いふのは今更文化を破壊して本に歸ることではない。唯文化はさう有難いものではないといふのである。

百姓は芋大根を食つて、今日食つてゐるものを甘いと思ふ。御馳走を欲しがらない。又其れを知らないのです。乙女が裾よけといふものをしてゐる。メリンスのやうなものである。そしてさういふものを美とする。其れは都會では美でも何でもないがそれを美とする。農家は其の家を善いと思つてゐる。其の住居に安んじてゐる。都會が善いとは思はない。其の風俗に安んずる。隣國と相望み犬や雞の聲が聞える。それ程近い所の隣國でも善いといつて行つて見る氣が起らない。試みに老子の考へてゐる所は云つて見ればかういふもので、兎角百里四方のものは二百里四方のものとしようとしてゐるが、さういふものではない。

信言不美章第八十一

信言不_レ美_ニ。美言不_レ信_ニ。善者不_レ辨_ニ。辨者不_レ善_ニ。知者不_レ博_ニ。博者

不^レ知[○]聖[○]人^ハ不^レ積[○]。既^ニ以^テ爲^レ人^ノ己^レ愈[○]有[○]。既^ニ以^テ與^レ人^ニ己^レ愈[○]多[○]。天^ノ之[○]道^ハ利^{シテ}而^{シテ}不^レ害^セ。聖^ノ人^ノ道^ハ爲^テ而^{シテ}不^レ争^ハ。

信^{まこと}の言葉は飾のあるものではない。ありのまま、善ければ善い、悪ければ悪いで其の儘であるから世間普通の考へでは美しくない。美言は屹度嘘だ。飾は嘘なんです。信言は飾を必要としない。善なるものは善いものだから辨明する必要はない。色々辯明をして言ひ譯をするのは元來善くないからである。道の根本を得てゐる知者は何も知る必要はない。根本を得てゐるからである。博知の者は迷ふ。聖人は徳を積むとか善を積むとかいふことがない。財ばかりでなく知識も智慧も道徳も積まない。積まずして人の爲にして己れ愈々有り。人に呉れしまへばしまふ程己れ愈々多し。人が放つておかないのです。矢張どうもさういふやうです。世の中を見てもさうです。自分の爲にする者は子孫も立ち行くやうであるが、却つて立ち行かぬ事が多い。紛骨碎身人の爲にしたといふやうな者は人が放つておかない。天の道は利して害することがない。害するやうに見えても利するのです。霜が降り雨が降つて害するやうであるが其れが爲に春芽が出るので、利して害することはない。天は爲すことは爲すが、爲して争はず。此の争はずといふのが此の一篇の主意です。争はずといふことで一篇

の終に結んであるが其れは自然にさうなつてゐるのです。(完) (十一月十日講)

附
錄

現代と老子の柔の教

西先生著「教育と道徳」所載

社會の生活は何時代でも其が生活であることから内容あるもの積極的のものでなければ生活は無いのであるが、只積極的ばかりといふは無限のみにあることであらうから、吾人の生活の如き有限なものでは積極的の裏には必ず消極的といふことがあるので、現にこれは世の中の萬事萬物につけて吾々が日々言ふこと又行ふことである。消極的のない積極的といふことは裏のない表といふ類であるが、しかし時の勢で吾々は表面の積極的のみに走り消極的を忘れ勝ちになる。特に所謂文明が発達して、生活の内容が豊富複雑になると此弊に知らず陥るのは人として免れ難い所である。現代は至る所に此積極的とか發展とかいふことを聞くので、養生攝生の人ですら兎角斯様なものを食ふがよい斯様な滋養物があるといふ風に取り入れそれで身體が健かになる方法のみを講じて居るかのやうに思はれるほど積極論が強い。食ふなとか減すとか抑へるとかいふことは餘り聞かぬ。しかし一方に取り入れて生を養ふ道があれば他の一方に減損して同じく生を養ふ方法もなくてはならぬ道理である。これは植木

などの栽培の仕方を見ても分かることである。消極的に踏み止まることなくして進んでばかりといふことは不可能なことで無理をすれば顛覆する外は無い。膨脹の仕通しといふことはあり得ぬことで必ず節減を餘儀なくせらるる時節が来る。しかし仕過ぎて又後戻りをするといふは宜しきを得たものとは言れぬ、失敗といふ外無からう。支那の昔時周の代は盛んなる文明を發し從て生活の内容が豊富活潑になつたことと想像せられるが、段々所謂爛熟といふことになり、諸侯の國々は互に相争ひ、又各國の内では諸人大に競ふやうになつた。つまり生活の内容といふことは概括して言へば智識と富と權力と名とである。此等のものを國々人々争ひ取らうとするのである。此等の内容が發展するにつれて其整理が容易ならぬことになつた。其整理の仕事に當るものは仁義道德或は禮樂刑政といふものであるが、其等の道德とか法とかいふもので制しきれないやうになつたと見える。しかし元來内容を競ふから仁義や法も喧敷くなつたので、知や富を左程尊いものに思ひさへせねば仁義や法も左程八釜敷言ふ必要もなかつたのであらう。それを八釜敷言ふ必要が起つたのは既にやり過ぎたからである。それで老子は聖人の禮樂とか仁義とかいふことよりもつと根本的に這入つて無事長久の安樂世界を説示したのが其陰柔の教であつて即ち消極的の行き方を示したものと思はれる。多分老子も仁義道德そのものを排斥し聖人をけなしたのではあるまいが、弊を救ふには他の極

端を示す必要を感じたこともあらうかと思はれる。但し勿論老子の柔の教は右の如く只五寸右に偏つたものを眞中に戻すには左の方に一尺引き戻すといふ方便説ばかりでなく、其説く所自身に眞理は自らあるに相違ない。現代の文明は歐米の産業的文明に最も強く影響せられてをると思はれるが、此の文明の大なる特色は科學智と富を其基本とする所にある。特に最近の傾向は從來一般に人が求めるものゝ一つである名譽面目の如きには餘程無頓着になり、又權力の欲望は強からうが其は今日は富と形影相伴ふ如き状態になつたから富力あるものに權力がつき廻はる故、其結果今日世界を支配する最大の力は富といふべきと思はれる。科學智を重寶がるのは主として其れが富を作る手段となるからである。其外科學智は吾人に百般の便宜を教へ示すのである。それでつまり智を重寶がり富を尊ぶのは一方人に勝つといふこと一方自ら享樂するといふこと、此二つを現代は大に求めて居るといふことになる。勝心と享樂欲が最も盛んである。今古の歴史に於て一番今日これが盛んであるかは知らぬが兎に角餘程盛んである。斯様なことがいよゝゝ甚しくなれば人生を破壊するに至るであらうし、さなくとも人生を不幸ならしめる。これは人生を幸福ならしめる道としても賢明なることではない。然るに是を整理する方法は消極的の外はない。消極を忘れた積極は躓くのは必至の勢である。此消極的の道は西洋では宗教であり、理想主義であらうと思はれる。西洋現代の

産業文明の弊害を除く道は西洋自身の中にもあるであらうが老子の説く所には自ら又別趣あつて且ついかにも明白に現代の缺點を指摘してをるかのやうに聞える。西洋の文化とは違つた趣きで人生を積極的に建設した所謂先王の道にも猶其弊を見て全然消極の道陰柔の道を説いた老子の説に吾々の反省すべきものあるを覺えるのである。左に少しく老子の言葉を掲げて其趣意を述べて見よう。勿論邦人には別に珍らしい説ではない筈であるが一般の風潮は全然之を知らぬかのやうに見え、却つて取るに足らぬ陳腐の言であると思ふ向きもあるかも知れぬ。尙ほ老子の言葉は其言葉通りにせよといふ趣意ではなからうと思ふ。積極があるから消極で之を収める必要もあるのであるから、要は今日の生活の裡に如何様に此趣旨を實現すべきかといふことが具體的問題である。私は今其は言ひ能はぬ。只老子の言を聽けば現代の風潮を超越すべき境地を想見することが出来る。しかして現代を處理して行くには必ず現代を超越した見地を要するのだと思ふ。

老子曰く、天下忌諱多くして而かも民彌よ貧し、人利器多くして國家滋す昏し、民技巧多くして奇物滋す起る、法令滋す彰はれて盜賊多く有り云々。(以正治國章第五十七……一四五頁参照) 忌諱多しとは澤庵和尚の解に左様はせぬもの斯様はせぬものといろく忌むこと、たとへば手を拭ふ筈の手拭にて足は拭かぬものと云へば足拭きと云ふものを別に持たねはならぬから

民貧となるのである。是は吾々現代眼前の事實である。今日は利器多く、技巧多く、それを文明の進歩といふ。人は只其に追はれて忙しく日日を過ごして仕舞ふ。百般の文明の利器は人に便宜を興へる利器ばかりと思へば只半面だけ見て他の半面に盲目である。現代の煩雜、窮迫、緊張は即ち此半面である。技巧發達して利器大に起れば、一つくのことにより適當した器物制度を設けるからそれだけ他の事物に融通せぬやうになり、それだけ不便となる。百の錠には百の鍵が入用であるやうなもので二三のもので十百に融通することが出来ぬ。それだけ煩雜であり心勞を要し窮窟である。これ皆智を尙とび貨財を貴ぶより起ることとなり。其智其富が却て人を縛るのである。老子曰く、賢を尙ばざれば民をして争はざらしむ。得難き貨を貴ばざれば民をして盜を爲さざらしむ、欲すべきを見ざれば心をして亂れざらしむ、是を以て聖人の治は其心を虚にし其腹を實にし其志を弱くし其骨を強くす、常に民をして知ることなく、欲することなからしめ、夫の知る者をして敢て爲さざらしむるなり、爲すことなきを爲せば治らざるなし。(不尙賢章第三……一〇頁参照) これ現代の智と富の文明が必然生存競争を激しくするに當る言葉である。今日世界各国が治まり兼ねてをるのが其事實上の證據である。科學いよく發達し富いよく増加して人は一向に幸福とはならぬ。却て國際的にも個人相互間にも競争が益々烈しくなる。「才智のものを貴ぶときは萬人賢を衒ひ、智を

弄したがる。」得がたき高價のものを貴ぶときは民衆が立ち兼ねて遂には階級戦を起す。欲すべきを見ざれば心をして亂れざらしむとある如く、作りさへせねば見もせず、見さへせねば欲しと思はず、民心は穩かである。「虚其心とは何も欲しがらざる事の無いやうにする事なり」。實其腹とは粗食を腹一ぱい食はせてふくれさすのである。其志を弱くすとは「タカブル事なくヘリクダル事なり、虚心なるが故に志がヘリクダリ亢らざるなり」。服人よりも美なるを誇らず心易きものである。其腹が充實してをるから其骨は強いのである。智と欲は相表裏するもので、知るから欲するのである。知ることいよ／＼多ければ欲することいよ／＼多く、いよ／＼心が苦しむのである。これ正しく現代の有様である。この智といふのは老子の見識の如き智ではない、科學智及び世の所謂才智である、見聞覺知のことである。夫の知る者をして敢て爲さざらしむとは知識才覺あるものは活動とか發展とか云つて兎角いろ／＼事をこしらへて自ら始末に困り人にも迷惑をかける。これも眼前吾々の見る所である。知慧あるやうであるが自繩自縛であると老子は見るのである。

老子曰く、五色は人をして目盲せしめ、五音は人をして耳聾せしめ、五味は人をして口爽はしめ、馳騁田獵は人をして狂を發せしむ云々、是を以て聖人は腹を爲て目を爲さず。(五色章第十二……四二頁参照) これは文明の發達で耳目口鼻を喜ばすものが日々に多く發明せられて人の

心はいよ／＼外向きになり自己を忘却し、快樂を求めて却つて寂しさを感ぜざるを得ざる現代の一面を指すといふも可である。又曰く、名と身と孰れか親しき、身と貨と孰れが勝れる、得と亡と孰れが病ましき、是の故に甚だ愛すれば必ず大に費す、多く藏むれば必ず厚く亡ふ、足ることを知れば辱められず、止ることを知れば殆からず、以て長久なるべし。(名與身章第四十……一八頁参照) これは富の獲得に奔走して徒らに一生を無意義に終ることを云ふ。名と貨を得んとして身を苦しめ遂には身を失ふが、得ると失ふと何れが病ましきか。すべて幸にして得ても得たものは必ず失ふ期のあるもので得通しといふことはない。初から得ざれば失ふ憂もない。されば得たが必ずしも幸でない。多く藏すれば多く亡なふ。甚だ愛すれば甚だ惜しみ悲しむ、これ皆長久の道でない。今日は生といふことを喧敷云ふ、即ち積極的、發展的と云ふことである。老子は曰ふ、民の死を輕んずるは其生を求むること厚きを以て是を以て死を輕んずと。(民之飢章第七十五……一八四頁参照) つまり餘りに生を求めるから却て死地に陥ることをいふ。餓死するものは千萬人中僅かに數人かも知れぬが、食ひ過ぎたためにいろ／＼の病を醸もして死するものは莫大の數に上ることであらう。これは只飲食についてのことであるが、すべて耳目口鼻心意を喜ばすものを求めるのが求生之厚であつて、此所に一切不幸苦惱の根源がある。今日の社會の悪い方面は悉く皆求生之厚から生ずるのであると老子は云ふ

であらう。然るにいやが上にも生を厚くすることの工夫のみに没頭してそれを文明の進歩と稱し、それは結局輕死の道であるに氣が付かぬといふのである。

欲なるものは斯く自殺的のものであることを老子は説いたのであるが、前にも云へる通り欲と知は相表裏するもので、生を求むること厚き半面は知識の獲得に汲々とするものである。而して其が矢張自殺的である。求知心は征服欲の一面である。知識の進歩は競争を烈しくする、従て結局互に相傷ける、世間が煩多險惡となる。老子曰く學を爲しては日に益す、道を爲しては日に損す、之を損し又損し以て爲すことなきに至る、爲すことなくして而して爲さずといふことなし。(爲學日益章第四十八……一三四頁參照)「爲學とは學を外に求めて今日一事を學び、明日又一事を學ぶなり。此の如きは次第に事多くなつて次第に學ぶ事多くなるなり。爲道は道を修する人なり。道を修する人は毎日無駄事を取つて退ける故日々に損すと云ふ。段々に減らして遂に無爲に至るなり。其の無爲の何でもない所に至れば何でも爲らぬ事はない。」つまり智識を追ふは挑み争ふ心である。智識で征服すれば又其上に研究するものに征服せられる。勝つたと思ふはつかの間のことである。理窟の詮議にしても多言數々窮と云へる如く、「何の斯のと言へば言ふほど道理がツマル」、到底勝ち終せることは出来ぬ。却ていよく治まり難くなる。老子曰く、民の治め難きは其智多きを以てなり、智を以て國を治むるは國の

賊なり、智を以て國を治めざるは國の福なり。(古之善爲道章第六十五……一六四頁參照) 斯様な意味の智識を養ふ教育の隆盛はいよく生存競争を激烈にして國は益々治めがたくなり、所謂國の賊となる。爲政者に此智慧があればいよくの教いるくの事を造り初めて徒らに事を多くし、民衆に此智慧があればいよく人に従はず、統一が出来がたくなる。

畢竟知と富は侵略的であり又享樂的であつて、若し之を統一すべき根源を反省せねば社會は一面弱肉強食の状態、一面頹廢の氣分に趨く外は無い。智と富は所謂陽剛なるもので、挑み合ひ争ひ合ふものである。學説にしても互に門戸を張つて争ふのである。自分が主義を標榜したとて人が屈するものではない。人を叩きつけやうと思ふは迷妄である。於是、老子の説は陰柔の教である。争はずして自ら足るのである。堅固長久である。一派を立てることは嫌ふのである。

老子曰く、侯王若し能く守らば萬物將さに自ら化せんとす、化して而かも作さむと欲せば吾將さに鎮するに無名の樸を以てす、無名の樸は亦た將さに欲せず、欲せざるも靜なるを以てせば天下將さに自ら正しからむ。(道常無爲章第三十七……九九頁參照)「道を守ると人が化し服してナビクなり。其時仕損ふなり。故に其時其を鎮づむるに無爲の樸玉を以てするなり。たとへばほど道を知れる人一人有つて其に人が靡き従ふと最早や其の一流が立つなり。是れ化し

て作るなり。實に道ある人なれば左様に人が知るとやがて化するなり。化すとて止むには非ず、只其れに取り合はぬなり。其が鎮以無名之樸とは云ふなり。「其の無名の樸といふものは無欲な事である。不欲なる時は好悪無く、何の念も無き故自ら靜なれば天下も正しきとなり。」老子の無爲とは先づ萬事萬物として生活の内容として現はれ出づる其の根源を指すといふも可である。故に是非とも斯様でなければならぬと固執はせない所である。多として現はれ出づる本の一である。多は惑の原因であり争の根である。一であれば惑ひやうも争ひやうもない。老子曰く、少なきは則ち得、多きは則ち惑ふ、是を以て聖人一を抱て天下の式となり、自ら見ざるが故に明なり、自ら是とせざるが故に彰はる、自ら伐らざるが故に功あり、自ら矜らざるが故に長し、夫れ唯争はず、故に天下能く之と争ふことなし。(曲則全章第二十二……六八頁参照)

老子は一、靜、虚、無に復つて多、動、實、有を鹽梅して行けよと教へて居る。勿論すべての生活内容を否定せよといふのではない。必ずしも智と富を無くせよといふのではなく、此等を全うする道の根據を示したと見るも可であると思ふ。柔の教は抑損の道なり、謙遜の道なり、儉約の道なり、辭讓の道なり、物をオシムのである。濫用せぬのである、控へ目にするのが全くする道であると説く。自ら天下を治めやうと求めるものに治めさすと悪しきものである。「天下を治るを活計とせぬ故左様の人に託すべしとなり。」自ら出張ることを甚だ忌

むのである。敢て天下の先とならざるものを推して先とするのがよい。老子曰く、我に三つの寶あり、寶としてこれを持つ、一には曰く慈、二には曰く儉、三には曰く敢て天下の先とならざるが故に能く勇なり、儉なるが故に能く廣し、敢て天下の先とならざるが故に能く成器の長たり、云々、夫れ慈は以て戰ふときは則ち勝つ、以て守るときは則ち固し、天將た之を救ふ、慈を以て之を衛ればなり。(天下皆謂章第六十七……一六九頁参照)「慈故能勇とは慈なるものは我れ獨りする勇に非ずして人とする勇故能く勇にして強し。」自ら儉約であつて始めて施し廣く及ぶ。儉をせずして廣き時は亡ぶ外なし。天下の先たらず謙遜なる故物を成就し物の長たることが出来る。若し先を争ひ挑むときは死を招くのである。老子の三寶は慈と儉と謙であつて、皆己を損減する消極の上に立脚する、これ大に積極的となる堅固な根據である。勇、廣、長の積極は消極を根とする。これ自然の理に合ふので天將た之を救ふと云ふのである。西洋の宗教でも修道院で從順、貧乏、獨身の三誓願を立てたのは老子の儉と讓のことである。其愛の教は即ち慈に外ならぬ。すべて消極の道は餘り澤山食はず、見ず、聞かず、言はず、心を役せず、費用をかけぬことである。之を内に保留蓄養する。之を老子は齋、即ち物ヲシミをすること、言つてをる。曰く、人を治め天に事まつるは齋に如くはなし、夫れ惟だ齋なり、是を以て早く復へる、早く復へる之を重ねて徳を積むと謂ふ、重ねて

徳を積むときは則ち克せずといふことなし、云々、是れ根を深ふし帯を固くすといふ、長生久視の道なり。(治人事天章第五十九……一四九頁参照) 我身、我心、外界の物すべて浪費せず。「道家にては衣食を始末する許りにもあらず手洗使ふとても水をだに妄に使はぬやうにするなり、妄に財を費さず、妄に食して口腹の破れなくよき筈なり。其の上湯水に至つても妄に費す時は冥加に盡くる筈なり。早復とは何事もとめどを知つて早く歸るなり。何事も十分になれば覆るは知れた事なれども調子に乗つて來ては止められぬものなり。かく人の見にくき所を見成りにくき事をするのが重積徳なり。既に徳を重ね積でからは克せぬと云ふ事は無い。目は目の力を盡して物を見、耳は耳の力を盡して聴き、口は舌の力を盡して言ひ、心は心の力を盡して思ひ、共に精神を外に洩らし竭す故遂に早く死する所なり」。これ今日いふ活動奮闘の正反對を説いたのである。萬事控へ目にする極を老子は虚、静、一、復など、云ふ、或は無といふ。其の無が萬有の本である故、無を守らぬときは萬事顛覆の患あるを説く。其所を明確に知るを明と言つてをる。曰く、虚極を致し、静篤を守る、萬物並びて作る、吾以て其復を観る、夫れ物芸々各其根に歸る、根に歸るを静と曰ひ、静なるを復命と曰ひ、復命を常と曰ひ、常を知るを明と曰ふ。(致虚極章第十六……五三頁参照) 右と同じ意味で又曰く、神を谷へば死せず是を玄牝と謂ふ、玄牝の門是を天地の根と謂ふ。(谷神不死章第六……一九頁参照) 「牝は女

なれば深静柔弱を守る道の事なり。」「一切の動は皆静に歸し、有は遂に無に歸す」。其静なる所が天地萬物の根、人間萬事の根である。故に動争剛強を好めば早晚滅亡するのである。只深静柔弱に居るものは綿々として絶えず、精神が明確でありながら却て有るか無きかに見える。而して是れ實に勇、廣、長の本であるとするのである。現代の産業的文明は科學智と富の文明であつて生存競争弱肉強食を誘致するは其の文明の性質上必至の勢であると思はれる。之を救ふ道は此文明自身の中、即ち科學や富の中には全然無いのである。然るに現代の諸弊を富の力や科學的智識によつて除くことを講ずるのは滋養物を食ひ過ごして胃腸の衰弱したのを更に滋養物を攝取して元氣を回復せんとするものである。産業的文明の弊を除くには此文明よりも深い人生觀によらねばならぬ。老子の柔の教其外これと同一主意の教に反省する外無いと思はれる。

昭和十三年八月十五日印刷
昭和十三年九月十五日發行
昭和十四年四月廿三日訂正改版印刷
昭和十四年四月三十日訂正改版發行

（非賣品）

兵庫縣神崎郡瀬加村上瀬加三三番地

編輯者兼 本間日出男

函館市金堀町三三番地

印刷者 渡邊直

終